

日曜日には鼠を殺せ (1964)

BEHOLD A PALE HORSE

メディア 映画

ジャンル ドラマ 戦争 サスペンス

製作国 アメリカ

色彩 B&W

時間 115分

初公開日 1964/11/20

公開情報 C O L

【解説】

優れた脚本家で監督でもあったE・プレスバーガーの同名小説を、「真昼の決闘」で有名なジンネマンが映画化。スペイン内乱から20年、かつての英雄マヌエル（G・ペック）は国境を越えてフランスへ逃れていた。一方、彼の故郷の警察署長（A・クイン）は、今でもマヌエル逮捕に執念を燃やしていた。ある時、マヌエルのもとに子供がやって来て、署長の拷問で殺された父親の敵を討って欲しいと頼む。内乱後も政府機関や銀行を襲ったマヌエルを、故郷では英雄視していたからだ。しかし、日ごとに老いていくだけの無為な日々を過ごしていたマヌエルは、動こうとはしなかった。その頃、故郷の母が危篤となり、署長はこれをマヌエルをおびき出す好機と考える。母はフランスに帰る神父（O・シャリフ）に、決して帰って来てはならないと遺言を託して息を引きとった。署長は母の死を隠し、マヌエル逮捕のために罫を張ろうと考えるが……。

かつての英雄が再び立ち上がった、というにはあまりにも悲壮感に満ちたドラマで、白黒の画面で描かれることにより、いっそう陰鬱としたムードが支配しているように見える。キャストの堅実な演技が光り、作品として風格も漂うだが、ジンネマン監督作中最も地味な作品という印象だ。なお、原題は黙示録第六章第八節から引用されたもので、邦題は原作名の“Killing a Mouse on Sunday”に拠っている。

【クレジット】

監督	フレッド・ジンネマン	Fred Zinnemann
製作	フレッド・ジンネマン	Fred Zinnemann
原作	エメリック・プレスバーガー	Emeric Pressburger
脚本	J・P・ミラー	J.P. Miller
撮影	ジャン・バダル	Jean Badal
音楽	モーリス・ジャール	Maurice Jarre
出演	グレゴリー・ペック	Gregory Peck
	アンソニー・クイン	Anthony Quinn
	オマー・シャリフ	Omar Sharif
	パオロ・ストッパ	Paolo Stoppa
	レイモン・ペルグラン	Raymond Pellegrin
	ミルドレッド・ダンノック	Mildred Dunnock
	ペレット・プラディエ	Perrette Pradier
	クリスチャン・マルカン	Christian Marquand
	ミシェル・ロンズデル	Michel Lonsdale
	ダニエラ・ロッカ	Daniela Rocca
	ロザリー・クラッチェリー	Rosalie Crutchley

allcinema

ロランス・バディ

Laurence Badie

マーティン・ベンソン

Martin Benson